

機械時代の拳闘士 (3)

—ジャック・ロンドンとボクシング—

Jack London on Boxing: A Pugilist in the Machine Age (Part 3)

小林 一博*

Kazuhiro Kobayashi

拳闘士たち

僕はいつだって真っ正直に真面目に闘ってきた。これまで一度だって汚い金に手をつけたことはないし、汚いインチキをしようとしたことだってない¹⁾。

こういいきるのは『奈落の獣』(*The Abysmal Brute*, 1913)の主人公パット・グレンドンだが、彼には、精神的な清浄さに加えて、肉体的な汚れもない。かつての名ボクサーでもある父の言によれば、彼は「清潔で、血の最後の一滴、筋肉の最後の一片まできれい」⁽⁸¹⁾ということになり、自他の評価はさらに、三人称の語り手によって、

堂々とした体躯、ハンサムな顔立ち、清楚な口元、曇りのない瞳、短く刈り込まれた金髪がかかる美しい額、肉体的な健康・健全さと清潔さのauraが漂う⁽¹⁰⁶⁾

といった具合に確認される。パットはまさしく「ロマンスの英雄」²⁾の美質をすべてそなえた存在といつてよいだろうが、こうしたある種の理想化は、何もこの森の巨人に限られたことではない。「ロマンス」の構造を持たない、基本的にはリアリスティックなリングの描写を含んだ、ほか三編のボクシング小説の主人公たちにも、共通の特徴といつても大ききくはずではないだろう。

例えば、『試合』(*The Game*, 1905)の主人公ジョー・フレミングの場合にも同様の記述が目につく。

身体の筋肉の最後の一片まで、血の最後の一滴まで、きれいなんだ。身体の表面を石鹸で洗ってきれいになっているだけじゃない。なかのなかまできれいにしているのさ。きれいだって身体が自覚している。朝起きて仕事にでかけるとき、身体のなかですべての血と肉が「きれいなんだ! 清潔なんだ!」って叫んでいるのさ³⁾。

精神的な健康/健全さと肉体的な健康/健全さが直接結びつき、それらに強迫観念的とも思えるくらい「清潔」であることが付加される。こうした身体と精神の直結ぶり、さらには「清潔さ」へのこだわりは、まさしく作家ジャック・ロンドンの生きた時代の標語「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」⁴⁾をそのまま表象し、社会の「汚れ」を駆逐してゆこうとした当時の改革主義運動の精神的根拠を察知させるものとしても読むことができるだろう。肉体へのこだわり、極端に「清潔さ」が強調される描写は、当然のことながら、執筆当時の作者の身体的/精神的状態が、直接的にも間接的にも影響していることも、疑いの余地がないように思われる。

けれども、そうした点についての言及はもう少しあとで試みることにして、ここしばらくは、作品にあらわれた拳闘士たちの姿を追っておこう。

「一切れのステーキ」(“A Piece of Steak,” 1911)に登場するトム・キングは、『試合』『奈落の獣』あるいは「メキシコ人」(“The Mexican,” 1911)で描かれる拳闘士たちとは違って、すでに盛りをすぎたオールドタイマーである。今や「過去の長い戦いによって、血管はふくれあがり、拳

* 助教授

は打ち碎かれ、骨までもろくなっている」⁵⁾ 老いぼれのひとりとなったことを自覚している彼は、若い対戦相手に善戦するが、結局は敗れ去る。そんな老雄の容貌は以下のように説明されている。

「ゆがんだ唇、ひどく残酷そうな口元」⁽⁹⁹⁾「押しが強く残忍そうな粗野な顎」「まぶたの腫れあがった動きのにぶい目」「振り返るようにせまい額」「二度も折られた鼻」「カリフラワーみたいな耳」⁽¹⁰⁰⁾。一言でいえば、その顔は「戦う獣の特徴を刻み込んだ」「長年、四角いリングで戦ってきた典型的な懸賞拳闘士の顔」⁽⁹⁹⁾であり、

要するにそれは、暗い路地や人気のない場所で恐れられる顔だった。けれどもトム・キングは犯罪者ではなかったし、いかなる犯罪も犯したことはなかった⁽¹⁰⁰⁾。

特に注目しておきたいのは、過去の戦いによって、いかにも悪党らしい外見になってしまっているが、その実、彼は「悪事をはたらいたことはない」「犯罪者ではない」ということわりのいれかたである。

もちろん、「無垢」なパット・グレンドンや「清潔」なジョー・フレミングに対する筆致と簡単に同一視できるわけではない。だが、少なくとも「リングの外ではのろまで呑気。若い頃には懐具合がよかったが金離れが良すぎた」⁽¹⁰⁰⁾「商売でも身につけておけばよかった」⁽¹⁰³⁾と思っているこの歴戦の兵が、リング内に於ても外に於ても不正なことをしないという点ではパットやジョーと共通の美質を備えているとあってよいだろう。

「メキシコ人」のフェリッペ・リヴェラも同様である。彼は「無垢」や「清潔」といった言葉によっては形容されることはない。だが、一徹に「革命」を標榜するその姿は、極端にすぎ、周囲の大人たちからまったく理解されないぶんだけ、なお一層の無垢ぶりを印象づけるとはいえないだろうか。

ボクシングを題材にした小説ではないけれども、いくつかの作品でロンドンが主人公をボクサー（あるいは元ボクサー）として設定しており、その描写も基本的に肯定的なものが目立つ。年代順に追ってみると、「スロットの南側」(“South of the Slot,” 1909)「夜に生まれしもの」(“The Night-Born,” 1911)『月の谷』(The

Valley of the Moon, 1913)そして「痣」(“The Birth Mark,” in *The Human-Drift*, 1917)が左記のカテゴリーに入るだろう。

理想を抱いて清潔な暮らしをしてきた。彼は酒も煙草もやらなかったし、罵り言葉を吐くこともなかった。その肉体は、若く美しい神のそれだった⁶⁾。

これは「夜に生まれしもの」の冒頭で、その死が伝えられた若き拳闘士オブライエンに対する描写だが、パットやジョーといった若い白人種のボクサーたちに対する表現との同一性は明白である。

何故にロンドンはこのような拳闘士たちを描き続けたのか。その理由を探るための手がかりとして有効なのは、おそらく、前稿でもふれた作家自身の言葉⁷⁾や『奈落の獣』や「メキシコ人」で描かれたパットやリヴェラの対戦相手たちの描かれ方だろう。

ロンドンにとっては社会進化論流の適者生存の理論⁸⁾そのままに、肉体的な強者であることが生き残りの前提であり、その意味では拳闘士たちが彼の理想となったのは当然といえば当然のことではある。けれども、その理想的な「肉体」を持つ彼らに、「無垢」であるとか「清潔」であるとかいった、ある種の「精神性」を背負わせて、立ち向かわせた相手が体現しているものこそ、恐らく作家が一番意識して、意図的に告発しようとしていたものといえるだろう。

例えば「メキシコ人」フェリッペ・リベラが、「革命」の成就に必要な銃を調達するための資金・五千ドルを得るために、四角いリングで戦う相手、ダニー・ウォードは次のような人物だ。

よき役者であり、上手に世間を渡るかけ引きでは、愛想の良さが最も貴い資質であるということを心得ていた。けれどもその実、彼は用意周到で冷酷な、ボクサーであり、ビジネスマンだった。それ以外は仮面なのだ⁹⁾。

ウォードが体現しているものは、『奈落の獣』のトム・キャナムやジム・ハンフォードと同様、明らかだろう。彼らは、同じリングに立つ存在であるが、ロンドンの拳闘士の主人公たちとは異質な存在といえる。

一言でいえば、彼らが表現しているのは、システムのなかで働き、利潤を追求するビジネスマンの姿である。「ナイス・ガイ」で人当たりがよく、所属している組織の内部での地位上昇を目指す、抜け目のない「オーガニゼーション・マン」¹⁰⁾の典型といってもよいだろう。彼らは独立独歩の拳闘士ではなく、ボクシングというスポーツ・ビジネスのなかの一部分。興行主、スーパーヴァイザー、マネージャー、トレーナー、レフェリー、賭博師、さらには記録映画会社なども含んだ組織のなかのひとりなのである。

だからこそワードは切符の売れゆきに関心を払い、入場料収入の歩合給を要求する。リヴェラが前近代的な「勝者総取り」を主張したとき「派手に芝居して」怒ったふりをしたのも、ビジネスのかけ引き上、必要との判断からだ。結局、申し出を受けたのは「千年たってもお前は俺に勝てない」⁽¹²⁸⁾とリヴェラにいい放った自信の故だし、それでも午前10時計量という保険をかける慎重ぶりである。彼にとっての「試合」は、ジョー・フレミングやパット・グレンドンのそれとは明らかに異なり、「勇気」や「男らしさ」を誇示する場でも、「名誉」のためのものでもなく、勿論、リヴェラの標榜する「革命」などとまったく無縁のもの。「ビジネス」ゆえに、利益を守って「安全に仕事する」⁽¹²⁸⁾ことをまず第一に考えるものである。

もっとも、このビジネスマンたちに対するロンドンの告発ぶりは必ずしも徹底してはいない。その理由は定かではないが、恐らく、彼らが彼の主人公たちと同じリングに立つ肉体的な理想の体現者たちであるがゆえではないか。

「痣」の主人公にして実在の世界ヘビー級チャンピオンでもあるボブ・フィッシュモンズ¹¹⁾に

どんな職業、ビジネスの世界にも不正直者はいるものさ。最高のファイターたちはそうじゃないがね¹²⁾。

といわせて、一応の差別化をはかってはいるが、『奈落の獣』におけるリングの不正告発の場面でのパットの観客にむけての大演説でもわかるように、最終的には弁護してもいるのである。作家の告発する相手、ボクサーたちに対する態度表明が明確に示されている箇所なので、以下、長め

の引用をしておきたい。

リングは腐っているのです。上から下まで——すっかりね。ボクシングはビジネスの原則で営まれているのです。ビジネスの原則って何だかご存じですよ。ずいぶんいわれていますから。皆さんは搾取されている間抜けなんです。皆さんの誰ひとりとしてリングから利益を得ているものはいない。今夜、座席が倒れてしまったのは何故でしょう。インチキで不正に利益をあげようとするやつがいるからです。座席も、試合と同じくビジネスの原則に基づいているのです。……(中略)……

二人掛けの座席に三人が押し込まれています。どこもかしこもそうになっている。これはどういうことなのでしょう。不正利益を得るための詐欺行為です。座席案内たちは給料を貰っていないのです。不正に利益を得ることになっている。そのお金を払っているのが皆さんです。もちろん皆さんが支払いをしているのです。どうやって試合許可を得るのでしょうか。不正利得によってです。さあ、ここで皆さんにお聞きしましょう。座席をつくったひと、案内係、それに官憲までもが不正利得を得ているとすれば、試合に係わるもっとうえの連中がそれを得ていないなんてことがあるのでしょうか。もちろん彼らは得ているのです。それを支払っているのは皆さんです。

いわせてください、これはボクサーたちの罪ではない。試合を運営しているのは彼らではないのです。興行主たちやマネージャーたちが試合を動かしているのです。やつらはビジネスマンなんです。ボクサーはただのボクサーにすぎません。ボクサーたちは最初のうちは真っ正直なのです。でも興行主たちやマネージャーたちが彼らを屈服させる。さもなければ、追い出してしまうのです⁽⁹⁰⁾。

ロンドンが彼の理想とする拳闘士たちに対抗させているのは「不正利得」を得ている「ビジネスマン」たちなのだ。そして、彼にとって特に問題なのは、「不正利得」を許容する組織構造、あるいは、そこからさらに発展して、彼が生きた社会のマネージメントの不合理さ、不当さであると思われる。

ジャック・ロンドンの機械

ここで改めてロンドンのいう「機械時代」についてまとめておきたい。そうすることで彼が拳闘士たちを描き続けた理由が一層鮮明になると思うからだ。サンフランシスコで行われたジェフリース対ルプリン戦で「機械時代」¹³⁾と称したその時代、そして「機械」とは彼にとっていったい何だ

ったのか。

前々稿¹⁴⁾ですでに指摘したように、彼が生きた時代は、南北戦争後の「発明の時代」¹⁵⁾を経て、のちのアメリカ的生活様式の基本となる大量生産大量消費が定着しはじめた時期。土地を基準にしたフロンティアはすでに消滅し¹⁶⁾、産業資本主義の社会体制が、基盤整備をおえて、飛躍的に伸長した時期とみてよいだろう。

その一方で、世紀転換期までには、一部の資本家たちが銀行、鉄道をはじめ多くの公共機関や基幹産業を押さえるという事態が出現する。1873年以降は、経済恐慌が頻発し、労使間の対立が激化。その結果、ストライキも多発した。そうしたなか、大量に流入した東欧をはじめとする世界各地からの移民が、伸長を続ける産業資本主義社会の基盤を支える下級の労働力となった。

ロンドン一家は移民ではなかった。だが、農場経営の失敗等の経済的苦境¹⁷⁾を経て、幼少年期のジャックも、移民たちと同様の低賃金の仕事に従事した。その代表的なものが缶詰工場や黄麻工場、あるいは発電所での労働¹⁸⁾だったと考えられるが、その時の経験が、作家の時代意識、社会のマネジメントのまずさと「不正利得」、あるいは「搾取」といった問題意識に大きな影響を与えていると思われる。

「革命」(“Revolution,” 1905)はそうした作家の意識が鮮明にあらわされた社会評論といえるだろう。これは、選任された大学社会主義連合の初代会長として、彼がイェール大学で行った講演の原稿でもあるが、その筆致はラディカルで、社会主義者¹⁹⁾として意気盛んなところをみせている。

この評論のなかでロンドンは「合衆国には一千万人の人々が貧困状態で暮らしている」²⁰⁾と説き、食料も住居も不十分な状態で「効率的な労働の基準すら維持できない」¹⁶⁾と指摘する。合衆国の労働者たちが有史以前の穴居人以下の状態に置かれていると主張し、自殺に追いやられた労働者から児童労働まで、その具体例を列挙してゆく。機械導入以前と以後を比較し、その効率化によって生産性が如何に向上したかを例示。そのうえで、にも係わらず、現代人が穴居人以下の生活を強いられるのは、社会の管理運営に問題があるからだと言断する。

彼によれば、社会を管理運営する階級である資本家階級は「これまでも管理運営に失敗してきたし、今でも失敗し続けている」¹⁴⁾訳だが、それは、

資本家階級が、盲目でどん欲。何でもかんでも自分のものにしたがり、最善のマネジメントができないだけでなく、最悪のそれを行っている。その管理運営は異常なほど浪費的／破壊的⁽²⁷⁾

だからということになる。

また、ロンドンが別の社会評論「競争システムによって社会はなにを失うか」(“What Communities Lose by the Competitive System,” 1900)では、土地や生産手段の私有によっていかに無駄が生まれるかを説き、それらの公有とベラミー風の徹底した分業による効率のよい社会体制²¹⁾を志向。現代社会のシステムを「混沌とした競争的生産のシステム」²²⁾と定義し、それによって適正な自然淘汰が行われず、軍事主義と商業主義が横行し衰退しているとみている²³⁾。

淀んだ空気、汚い水、貧粗で混ぜ物のはいった食料、不健康な工場労働、人口密集、疾病など、社会の身体的・精神的・道徳的気質を衰退させるあらゆるものは、つねに基本的に競争システムについてまわるものなのだ⁽⁴²⁸⁾。

こうした、適正に、あるいは効率的に機能しないシステムによって生み出された環境のなかで働く労働者の姿を作家はいくつかの作品に登場させているが²⁴⁾、彼の認識を顕著にあらわしている作品としては「背教者」(“The Apostate,” 1905)と『鉄の踵』(*The Iron Heel*, 1908)があげられるだろう。

「背教者」は1906年9月号の『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』誌に掲載された短編。この号は当時流行したマックレイキングの流れにそって「児童労働」を特集しており、ロンドンの小説は巻頭に置かれた。主人公の少年の名前ジョニーは、作家の幼少年時代の呼び名でもあり、黄麻工場が舞台でもあることから、自身の体験をもとに書かれた作品であることが推測できる。

作品は、劣悪な環境のもと、ジョニーが人間性を失い、と同時に機械化してゆく様を、圧倒的な

機械の悪夢的イメージとともに描き出している。その機械化=非人間化の過程こそが、実体験に基づいて、作家が時代の「機械」とそのもとの働く「労働者」に抱いたイメージだといえるだろう。ジョニーは機械のなかで生まれ、育ち、一度は脱出を試みるが、結局は機械のなかに帰ってゆく²⁵⁾。その姿は、どんなに「機械」から逃れようとしても結局のところ逃れられない、多くの労働者たちの姿を写し出しているといってもよいかも知れない。

「背教者」の主人公は「完璧な機械に進化した」²⁶⁾存在であり、「無駄な動きはすべて排除された。その細い腕の動き、細い指のなかの一本の筋肉の動き、それらのすべてが素早く正確だった」(127)という「完璧な労働者」(121)である。彼は「輝かしい見本」(121)であると同時に、すでにくる病にかかっている「最後に癲癇で死ななかつたとしたら、それはその前に結核でやられてしまっているから」(123)といった存在であり、内面的にも、

彼の意識は機械の意識だった。そのそとでは彼のこころは空白だった。彼には理想などなかった。…(中略)
…彼は労働獣だった。精神生活など皆無だった(137)

と評される。ジョニーは「病んだ猿」、「人間の戯画」(137)、であって、機械に収奪し尽くされ、病に冒された肉体的弱者なのである。ロンドンにとって「完全な労働者」とは、自立した意志をもった存在などでは決してなく、「機械の意志」に操られる自動人形にも等しい存在なのであり、逆にいえば、「機械」とは、まさしく、そうした存在を生み出すものであるのだ。

一方、『鉄の踵』では、主人公のひとりアーネスト・エヴァーハードによって、20世紀初頭の合衆国に対する批判・告発が繰り広げられるが、その内容はロンドンが社会評論で展開した議論を基本的に踏襲している。こうした観点から、作中人物アーネストの発言は、作家ロンドンの思考を間接的に表現しているとみてよいだろう。特に「背教者」と同様に機械のもとの非人間的な労働と搾取の実態を描いた「ジャクソンの腕」「機械の奴隷」の各章は「機械」に対する彼のイメージ、認識を再確認する材料を与えてくれる。

例えば、熟練工ジャクソンが機械に巻き込まれて腕をなくし、その責任を争う裁判では、会社が現場にいた同僚たちを抱き込んで、勝利するが、その勝利に貢献した小資本家ウィックソンが弾劾される場面でエヴァーハードは、

インダストリアル・マシーン
産業機構のなかでは自由意志を持ったやつなんか
いやしない。大資本家は別だけれどね²⁷⁾

と語り、小資本家=ビジネスマンに対する作家の認識を明らかにする。裁判を自由に動かし、一見、思いのままに振る舞っているウィックソンのような存在でさえ、ロンドンにとっては、産業社会という「機械」に操られる「人形」に過ぎない。「機械の奴隷」という言葉は、実際に機械のもとの働く労働者たちだけではなく、ホワイトカラーの中産階級、さらには小資本家階級にも向けられていることは疑いの余地がない。

『鉄の踵』で示された作家の「機械」に対する認識は「背教者」で示されたそれを拡大したかたちで確認させてくれるが、彼にとっては、産業「機械」だけではなく、産業「機構」そのものもまた「マシーン」のイメージで語られる存在であるということにも注目しない訳にはいかないだろう。こうした社会観は「機械の破壊者」「夢の数学」の章でも繰り返されるが、これらの章では、ロンドンが単なる機械嫌いではないことも示唆されている。彼一流の社会進化思想にもとづいて、機械の登場を不可避的なものとして捕らえているのである。

小資本家、中産階級のビジネスマンたちが大企業やトラストの「機構/機械」破壊するよう主張するのに対してアーネストは、そうした行為が一世紀半前の機械毀損運動と同じくらい愚かなことだという。「競争の消滅と結合の到来」(128)がトラストによってもたらされたのだが、それは「結合が競争よりも強い」からであって、「社会進化の決定事項であって、神の声」(132)だからなのだ。

効率的で安価に生産できる素晴らしい機械/機構を破壊するのはやめようじゃないですか。それを我々がコントロールしましょう。機械のもたらす効率と安さで利益を生むのです。我々自身の手で機械を動かしまし

ょう。現在の機械の所有者たちを追い出して、我々が機械を所有するのです(134)。

問題は「現在の機械／機構の所有者たち」すなわち「大銀行家、鉄道王、企業主、トラストの大立者たち」、アーネストが「独裁」と呼び、小資本家たちが「富豪」(153)と呼ぶ人びとの管理運営能力の欠如とどん欲さであって、社会主義へと向かう進化の過程で、当然の帰結として登場してきた機械／機構の存在そのものではないのだ。

とはいえ、作家にとっての「機械」は、英国の首都ロンドンのイーストエンドに対する比喻「人殺しの機械」²⁸⁾、あるいは非熟練労働者としての経験を描いたいくつかの作品などから推しはかるかぎりにおいては、基本的には、悪夢的なイメージを喚起させる存在という総括をしても間違いではないだろう。そういった意味では、ロンドンにとっての「機械」もまた、アンビヴァレントな存在といえるかも知れない。

機械時代の拳闘士

彼女はあやうく彼が懸賞拳闘士であることを望むところだった。彼が拳闘士であることは邪で心地よかった。懸賞拳闘士たちはそれほど恐ろしく神秘的な男たちなのだ。普通の人びとでも、大工や洗濯屋のようなありふれた労働者でもない。彼らはロマンスを、そして力を体現しているのだ。彼らがボスのために働くということはない。自分の力で偉大な世界と堂々たる格闘をし、反抗的な拳で素晴らしい生活をもぎとるのだ²⁹⁾。

これは『月の谷』で主人公ザクソン・ブラウンが夫となるビリー・ロバーツに対して抱いた感情だが、彼女のこの言葉がロンドンの拳闘士に対する感情をそのまま集約しているように思われる。すなわち、ロンドンにとっての拳闘士とは、「普通の人びと」とは異なる「ロマンス」「力」を体現する存在であり、「ボス」のためには働かない「自らの力で」世界を切り開いてゆく存在なのだ。

ジャック・ロンドンはいくつかの拳闘士たちを、ビジネスマンたち、さらには彼らを生み出してきた「機械／機構」に対立するものとして描き、いくつかの作品では、それを乗り越え、変革さえもたらす存在として描いている。そして、その基底には、彼自身の経験から生じた機械嫌い

な力に対するある種の信仰³⁰⁾があると考えられるが、それにしても何故、拳闘士なのか。

その作家としての活動の中期以降(特に後期に)、様々なかたちで拳闘士たちを作品のなかに織込んでいった理由を考えてみると、例えば、ロンドンの個人的状況に限ってみても、少なくとも二つの角度からのアプローチが可能であると思われる。ひとつは彼のいう「社会主義」の限界、もうひとつは彼自身の身体的状況の悪化である。

前章で明らかにしたように、ロンドンはいくつかの社会評論のなかでアメリカ社会の矛盾を説き、改革を訴えた。けれども、彼は現状システムの批判はし得たかも知れないが、具体的な改革のための指針は示し得なかった³¹⁾。

それは、一言でいえば、「社会主義者は頭脳、進歩、そして人間性の貴族社会のなかの真の貴族」³²⁾であると考える一方で、社会主義運動の担い手となるべき労働者階級を信頼しきれない³³⁾という、彼自身が抱いていた乖離に起因すると思われる。

また、もともと、

その冒険物語から読者が受ける印象とは裏腹に、ジャック・ロndonは肉体的には強靱ではなかった。その手脚は身長割には小さく、手首や足首を痛めやすかった。肉体的な重労働に対する生得的なスタミナに乏しく、それを発達させることもなかった³⁴⁾

というロンドンの身体的状況は、健康優良児のそれとは間違っても言えないように思うが³⁵⁾、そうした状況が大きく変化するのは、スナーク号で世界一周の航海に出、その途中、熱帯性の皮膚疾患「いちご腫」やマラリアなどの病気に冒されて以降のことだったと思われる。

月の谷の農園にもどると、私はまたひっきりなしに飲み始めた³⁶⁾

と、自らも認める「飲酒癖」に起因すると思われる様々な症状に悩まされるようになったのである。

ジャックはずいぶん変わった。成功して金持ちになってダメになったのかと友人たちは思ったが、そうした変化の原因は、大量の飲酒、ロンドンの所謂「長患

い」による37)

とは、リチャード・オコナーの弁だが、クラリス・スタッズも同様にアルコール依存症によって、ジャック・ロンドンの健康が危機的状況にあったとしている³⁸⁾。またラス・キングマンの伝記でも、彼が「大酒飲み」であったこと、「白い論理」と称する憂鬱状態にしばしば陥ったこと、少なくともその死の3年前からは尿毒症の末期的な症状に苦しんでいたことが指摘されている³⁹⁾。

いずれにせよ、その健康は、1911年には保険加入を断られるほどの状態になっており⁴⁰⁾そうした自らの肉体の危機の自覚、さらには彼自身の抱く社会主義の理想と現実の落差に対する認識が、ある種の代償規制的な行為として、ロンドンを拳闘士執筆に向かわせたのではなかったか。

けれども、こうした個人的な状況だけからジャック・ロンドンの拳闘士たちを考えるのはやはり不十分だろう。それにしても何故、「システム」に対抗するのに「拳闘士」、「機械」に対抗するのに「肉体」でなければならなかったのか。

T. J. ジャクソン・リアーズの主著『神の恵みもなく』(No Place of Grace, 1983) がその手がかりを与えてくれる。リアーズによれば、世紀転換期には、進行化するモダンに対抗するアンチモダンな衝動があらわれる。それは具体的には「審美主義者や改良主義者は中世職人の厳しいが満足のゆく生活を取り戻そうとし、軍国主義者は古代の軍事的活力に再び灯を点そうと熱意を傾け、宗教懐疑主義者は小作農の熱烈な宗教的確信と神秘主義者の恍惚に憧憬した」⁴¹⁾といった心性となり、中世趣味や東洋趣味となってあらわれた。

仮に、

アンチモダニズムは単なる現実逃避ではない。それは二律背反的なもので、物質的進歩に対する熱意と共存することも珍しくなかった。アンチモダニズムは、軍国主義や「革新主義的」社会改良から通俗的なオカルティズムや深層心理に対するごく初期の熱中までの広がりを持つ、強烈な経験を求めるより広汎な探求の一部である(xv)

とするならば、ロンドンの拳闘士たちも、こう

した心性の生み出したものではなかったか。

進行する産業資本主義社会のもと、断片化し、非現実的になってゆく日々の生活のなかで、中産階級の人びとは「現実」を感じるためにアンチモダンな衝動を抱き「強烈な経験を求め」ていった。「誇示的消費」はそうした「経験」のひとつ、「現実」を獲得するための、分かりやすく、身近な行為だったといえようが、その代表的なものが、女たちにとっての「ショッピング」であり、男たちにとっての「スポーツ」だったといえるだろう。作家ロンドンもまた例外ではなく、ショッピングはいうに及ばず、「自転車」「ボクシング・フェンシング・逆立ち・高飛び・幅跳び・砲丸投げ・水泳」⁴²⁾などのスポーツを楽しみ、自らの肉体を鍛えることに熱心だったという。

そして、スポーツ振興のうらには勿論、産業化と相まって、男たちを捕らえていた不安が存在する。「過度に文明化」し「女性化」してしまった民族に対する不安は、例えば、合衆国におけるアングロ・サクソン系の出生率の低下などの「科学的」データに具体的に表現され、「民族的自殺」という言説すら生み出した⁴³⁾。

そうした時代においてボクサーたちはある種のセレブリティだったのだが⁴⁴⁾、その理由はもはや明白だろう。男たちにとって「ボクサー」は見事に「過度に文明化し、女性化した」男性性を回復、あるいは拒否した証であって、危機意識を払拭させるに十分な例示だったのである⁴⁵⁾。

もちろんこうした危機意識を抱いた多くは中産階級の男たちであって、前章でも確認したとおり、ロンドン自身は中産階級出身ではなかった。けれども、幼い頃から中産階級的な生活を常に意識させられ⁴⁶⁾、作家となって成功した後には、一線を画しながらも、彼らの生活様式を積極的に取り入れた⁴⁷⁾人物が、同時代人として同様の危機意識に包摂されていたと考えるのはそれほど不自然なことでもあるまい。

彼にとってボクシングは、

いろいろな競技があるが、実をいえば、ボクシングが私の好きな唯一のものだ⁴⁸⁾

といわしめるほどにお気に入りのスポーツだっ

た訳だが、ロンドンが小説のなかに登場させたボクサーたち、いや拳闘士たちは、その機械嫌いとも相俟って、明らかに、リアーズが指摘した中産階級の中世の職人に対する憧憬と同質の、アンチモダンな衝動が生み出したものとして読める。

『試合』のジョー・フレミングは言葉による表現力に欠けるかわりに「手で、仕事で、肉体で、四角いリングのうえの筋肉の動きで自らを表現」(18)し、試合の結果に対して「自らの努力と勤勉な仕事ぶりによって得た力と達成」(24-25)を感じなくてはならない。「一切れのステーキ」のトム・キングは、空腹を抱えながらも「現代の労働者のように機械を動かしてではなく、昔ながらの、原始的で、堂々とした、獣じみた方法で、戦いとることによって——妻と子供たちのために肉を得るために夜のなかへと出掛け」(108)なくてはならない。「メキシコ人」のフェリッペ・リヴェラは、その「革命」の資金を、自らの「切れた唇、黒ずんだ頬、腫れた耳」(121)をその代償として、「真迫の」(127) 49) 試合によって獲得しなければならないし、『奈落の獣』のバット・グレンドン是不正をたたくために「真実の試合」(135)をしなければならない。

彼らは過酷な「現実」と対峙し、ときには敗れ去ることもあるかも知れないが、中産階級の男たちのように、分業化された仕事の一端を担い、自らが分断化され、希薄な現実感覚に悩まされるということは決してない。『月の谷』のビリー・コーンと同様に「普通の労働者とは違って」「ボスのために働くことはない」——要するに、産業資本主義が隆盛を極める以前の、前近代的な独立自営の存在として位置付けられているのである⁵⁰⁾。

四編のボクシング小説のなかでは、最後に書かれた『奈落の獣』がこうしたアンチモダンな衝動を最も顕著にあらわしている。この小説は雑誌掲載当時は高級誌への掲載を断られて、作家の嘆きの種になったようだけれども⁵¹⁾、単行本としてマクミランから出版されたときには「即座にあたりをとった」⁵²⁾という。当時の書評はこの書物を

壮大で、力強い、スリル満点の懸賞拳闘試合の話である。この小説を読めば、張りつめた生の営みや試合そのものの興奮の背後に、大試合を目論んではピンはね

をするずる賢い男たちの不正、邪なやり方を知ることができる。だが、それ以上に読者が理解するのは奈落の獣その人の魂——ロンドンが描いたなかでも、最も風変わりで、最も人間的で、魅力的な人物たちのひとり——拳闘士であり哲学者でもあって、正直で清潔、現実が暴露されるまでは無垢な、その魂である。アメリカ的生活の風変りな真実の一断面⁵³⁾

と評したが、こうした好評はやはり、『奈落の獣』が世紀転換期の心性と見事に一致し、人びとが求めたカタルシスを与えずにはおかないものだったからだろう⁵⁴⁾。また、この小説のプロット提供者シンクレア・ルイス宛の書簡から、ロンドン自身も読者と同じく満足感を味わったことがあきらかになる。

お金の足しにはならなかったけれど、個人的には『奈落の獣』を書いたってことが、すごく嬉しいのさ⁵⁵⁾。

ロンドンの拳闘士たちは、彼自身が求め、多くの人びとが求め、そして機械時代のアメリカが求めたものに他ならない。

(1997. 12. 24 受理)

註

- 1) Jack London, "The Abysmal Brute," in *The Game and The Abyamal Brute*, ed. by I. O. Evans (New York: Horozon Press, 1969), p. 110. 以下、本書からの引用は頁を本文中に()で示す。また各テキストからの引用も原則として初出を註のかたちで示し、以降は同様の手続きをとる。文脈によって、どのテキストからの引用かは明らかだろう。
- 2) ノースロップ・フライは、時を経て「神話」が世俗化したものを「ロマンス」と呼び、小説とロマンスの違いを登場人物の性格造形の差によると定義している。ロマンスは「ほんとうの人間」を創造するというより「様式化された人間」を提示する。人間がもつ様々な性格・要素の一部分を拡大してみせるのがロマンスという訳だが、それ故に登場人物は「夢想によって理想化される」。ロマンスの主人公は、普通のありふれた人物ではなく、美男(美女)・英雄・超人的な能力の持ち主で、ロマンスは貴種流離譚な「物語」として、他界や異界が存在するような位相構造を持つという。また、フライはスコットやブロンテ姉妹のロマンスを「中部地方に起こった工業社会に対するロマンティックな反動」とみているが、ジャック・ロンドンの拳闘士たちの描きぶり

を考える上で、興味深い指摘である。詳しくは、Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (New Jersey: Princeton University Press, 1957)、同翻訳書=海老根宏ほか訳『批評の解剖』(法政大学出版局、1980年)を参照のこと。

- 3) Jack London, *The Game* (New York: The MacMillan Company, 1905), pp. 27-28.
 4) ロンドン自身も娘ジョウンへあてた1915年9月16日付の手紙のなかで以下のような言葉を残している。

我々のからだは我々のところと同じくらい素晴らしいものだし、それに、不潔な肉体なんかでは気高い精神は維持できないものなんだ。その肉体が、きれいに、快適に、魅力的に着飾っていないときには、健全な肉体をしていても、気高い精神や高い自尊心を持ち続けられないのも同じ理由からなんだ。

肉体と精神の一致、そこにさらに服装がからんでくるところが、いかにもロンドンらしい[Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard, eds., *The Letters of Jack London* (Stanford, California: Stanford University Press), p. 1501. 以下、*Letters* と略記]。

- 5) Jack London, "A Piece of Steak," in *Stories of Boxing*, ed. by James Bankes (Madison, Wisconsin: Wm. C. Brown Publishers, 1992), p. 101.
 6) Jack London, "The Night-Born," in *The Portable Jack London*, ed. by Earle Labor (New York: Penguin Books, 1994), p. 263. 以下、*PJL* と略記。
 7) 「人生は闘争であるから、肉体的な弱者は最も厭わしいものだ」というアンナ・ストランスキー宛の書簡に書かれた言葉。1900年1月21日付。*Letters*, p. 145.
 8) 最初に彼が社会進化論的な思想にふれたのは1892年オークランドで行われたカルフォルニア大学の公開教育でデヴィット・スター・ジョーダン(David Starr Jordan, 1851-1931)が行った講義でだと思われる。また、学生となった後のカリフォルニア大学の「作文」の授業では97年に「ダーヴィン、ティンダル、ハクスレー、スペンサーその他」を読んでいる。
 9) Jack London, "The Mexican," in *Stories of Boxing*, ed. by James Bankes (Madison, Wisconsin: Wm. C. Brown Publishers, 1992), p. 126.
 10) 「ナイス・ガイ」については奥出直人『トランスナショナル・アメリカ』(岩波書店、1991年)、「オ

ーガニゼーション・マン」についてはW. H. White, *The Organization Man* (New York: Simon and Schuster, 1956)、同翻訳書=岡部慶三ほか訳『組織のなかの人間』(東京創元新社、1959年)を参照のこと。

- 11) Robert Fitzsimmons (1862-1917) は第3代の世界ヘビー級チャンピオン。1897年3月17日ジェイムズ・コーベットから王座を奪い、99年6月9日ジェイムズ・ジェフリーズに敗れるまで在位。2年3ヶ月に及ぶ在位期間中にフィッソモンズはまったくタイトル戦を行わず、その代りに、寸劇をとり入れたショーの全米ツアーをこなしてお金を稼いだという。ロンドンがフィッソモンズ夫妻のために書いた「痣」もこうしたショーの演目のひとつだったようだ。ロンドン夫妻とフィッソモンズ夫妻の親交はその手紙からもうかがえるが、ロndonは1910年8月11日にはロバート宛に「あなたはいつだって私の英雄でした」(*Letters*, p.924)と書き、敬愛ぶりを示している。フィッソモンズは「ライト級の脚とヘビー級の上半身、鍛冶屋として鍛えた力強い肩と筋力を持っていた」という。フィッソモンズに関してはSamuel Andre and Nathaniel Fleischer, *A Pictorial History of Boxing* (New York: Bonanza Book, 1981), pp. 78-81参照。
 12) Jack London, "The Birth Mark," in *The Human Drift* (New York: The MacMillan Company, 1917), p. 175.
 13) Jack London, *Jack London Reports*, eds. by King Hendricks and Irving Shepard (Garden City, New York: Doubleday & Company), p. 252.
 14) 小林一博「機械時代の拳闘士(一)——ジャック・ロンドンとボクシング——」(『中央英米文学』第27号、1993年)、40-52頁。特に43、45頁。
 15) 特許の件数だけを比較しても南北戦争の後の合衆国に発明の時代が訪れたという根拠になるだろう。1863年には6万2千件だったものが1900年には63万7千件にもなっている(奥出、12頁)。また、1790年から1860年にかけての特許件数は3万6千件、1897年1年だけでも2万2千件、1860年以降の70年間に150万件という数字もある[Mary Beth Norton, et.al., *A People and a Nation* (Boston: Houton Mifflin Company, 1994)、同翻訳書=上杉忍ほか訳『アメリカの歴史』第三巻「南北戦争から20世紀へ」(三省堂、1996年)、239頁]。
 16) ロンドン自身も同様の時代認識をもっていた。ターナー流の歴史認識を彼が披瀝している「階級闘争」["The Class Struggle," in Jack London, *War of the Classes* (New York: The MacMillan Company, 1905)]では、合衆国で起きて

- いる資本家階級と労働者階級の階級闘争は、フロンティアが消滅し上位の階級に下位の階級が入り込む余地がなくなったことに起因すると分析している。
- 17) 作品に描き入れたロンドンの貧困体験は、彼が作り出した「神話」であり、誇張されているという説もある。例えば、クラリス・スタッズは「一家は当時の平均的な労働者の家庭よりも間違いなく良い暮らし向きをしていた。フローラがかつて所属していたお上品な中産階級のメンバーではなかったけれど」[Clarice Stasz, *American Dreamers* (New York: St. Martin's Press, 1988), p. 22] と指摘する。
- 18) 発電所では二人分の労働（ひとり当月40ドルに相当する）をひとりですらされ、給料は一人分ももらえない（月30ドル）、おまけに彼のかわりに誠首になった労働者が、それが原因で自殺するという経験をしている [Jack London, *John Barleycorn* (1913, Oxford & New York: Oxford University Press, 1989), pp. 117-18; Russ Kingman, *The Pictorial Life of Jack London* (New York: The Crown Publishers, 1979), pp. 49-50. *John Barleycorn* は以下 JB と略記]。
- 19) キャロリン・ジョンストンは彼の社会主義が、幼少年期の経験や労働体験を精神的に癒す働きをする「宗教」でもあったと指摘。また彼女は、彼の社会主義はマルクス主義の観点からは社会主義と呼べず、むしろ反資本主義と呼ぶべきと主張している [Carolyn Johnston, *Jack London-An American Radical?* (Westport, Connecticut: Greenwood Press), pp. 63-107, 181-82]。
- また『ジョン・バーリコーン』のなかでロンドン は自ら抱いていたアメリカの成功の夢——「運河で働く少年も大統領になることができる」(114) がこうした労働経験によって神話であることを思い知らされた」と書いている。
- 20) Jack London, *Revolution and Other Essays* (New York: The MacMillan Company, 1910), p. 16.
- 21) もちろんこれはエドワード・ベラミー (Edward Bellamy, 1850-1898) が『顧りみれば』(*Looking Backward 2000-1887*, 1888) のなかで描いた社会である。
- 例えば、ロンドン は、この評論のなかで「ひとつの大きな店があれば、小さな何ダースもの店がする分配の機能を果たすことができるし、それをより効率的に、少ない経費と労働で運営できる。巨大な百貨店の成功は、こうしたことの輝かしい証拠である」(421) と述べている。
- 22) Jack London, "What Communities Lose by the Competitive System," in *Jack London/American Rebel*, ed. and written by Philp S. Foner (New York: The Citadel Press, 1947), p. 425.
- 23) ロンドンによれば、軍事主義は優れた種とその子孫を戦場に送り出す一方で、本来なら生き残れない劣った種とその子孫を社会に残し、商業主義は相手を負かすためにより安く生産しなければならぬために、労働力を不当に安く使用することになる。なお、「商業淘汰は種の売春であり、これが続けば、種の退化を意味する」(428) という議論は前掲の「階級闘争」でも再度展開されている。
- 24) 例えば『マーティン・イーデン』(*Martin Eden*, 1909) でもそうした労働は描かれる。
- 25) Mark Selter, *Bodies and Machines* (New York & London: Routledge, 1922), pp. 13-17. この物語の結末部分について、解釈はいくつかに別れるかと思われるが、少なくとも工場からの逃避によってジョニーに明るいその後が用意されているようには読めない。ジョニーの意識は機械のそれであって、機械から解放されると読むよりも、セルツァーのように母なる機械の胎内に回帰すると読むほうが「自然」であろう。
- 26) *PJL*, p. 121.
- 27) Jack London, *The Iron Heel* (New York: The MacMillan Company, 1908), p. 67.
- 28) Jack London, *The People of the Abyss* (New York: The MacMillan Company, 1903), p. 47.
- 29) Jack London, *The Valley of the Moon* (New York, The MacMillan Company, 1916), p. 17.
- 30) ロンドンの多くの作品において「原始」は決して否定的なものではない。例えば、『野性の呼び声』(*The Call of the Wild*, 1903) のバックや『海の狼』(*The Sea-Wolf*, 1904) のハンフリーは「過度に文明化した」存在から「原始」に出会うことによって再生する。「メキシコ人」フェリッペの「革命」成就のための原動力は「原始人、野性の狼、噛みつくガラガラ蛇、刺すムカデ」(121) と評されるものであり、『奈落の獣』のバットも「野性の生き物、20世紀の若者というよりも古い御伽噺や民話か何かに出てくる、夜うろつく生き物みたいだ」(77) と評される。
- また、ボクシングという競技もロンドンにとっては「我々のなかにある猿と虎」の本能、すなわち原始的な力のなせる競技であり「我々の意識に深く刻み込まれ、本性に織り込まれている…民族の本能的情熱である」(Jack London, an article of *The Pittsburgh Labor Tribune* on August 4, 1910, quoted in Kingman, p. 226) ということになる。こうした「原始」「本能」は「機械」と対比されて改めて意味を持つことはいうまでもない。
- 31) 「ミダスの手先」("The Minions of Midas," 1901) 「デブスの夢」("The Dream of Debs,"

1909)あるいは「ゴリア」(“Golia,” 1910)といったSF作品では、理想の社会を実現するための手段として、脅迫、暗殺、独裁、暴力などが描かれる。現実の社会問題に対して、評論等では具体的な対案を示せなかったロンドンの苛立ちがこうした作品を生んだとも思える。また、「革命」のなかで彼は「革命家は(拳)闘士である。彼ら平和を愛する。彼らは戦争を恐れない。彼らは、何にもまして現存の資本主義社会を破壊し、全世界を掌握することを標榜する」(8)と論じ、武力闘争をも肯定している。

32) Dan Daily, “A Chat with Jack London,” Chicago, April 1906, Scrapbook 7, Jack London Collection, Henry E. Huntington Library; Johnston, p.125.

33) 1916年9月21日付の社会党脱退状には「プロレタリア階級は自ら救えるでしょうか。そうでなければ、救いようがありません」(Kingman, p. 269)とある。また、ロンドン『鉄の踵』などいくつかの作品で、こうした階級の人びとに対して「乱衆(mob)」という表現を用いている。

村山淳彦は「社会主義者としての開眼と限界」[大浦暁生監修『ジャック・ロンドン』(三友社出版、1989年)所収]のなかで、ロンドンが「革命の主体は民衆であるという思想がついつかめなかった」(167)原因として「プロレタリア化」への「不安」と「ブルジョア化への恐怖と熱望」(168)をあげている。

34) Stasz, p.135.

35) 3才の時、ジフテリアで死にかけて以来、ロンドンは実に様々な病気やケガを経験している。目ぼしいものをいくつかあげれば、幼少の頃からの虫歯、ソフィアサザランド号での帯状疱疹、クロナダイクでの壊血病、メキシコでの赤痢など(どこかへ長期間出掛けるたびに体調を崩している観さえある)。特に虫歯は問題で、18才の頃にはすでにうえの歯のほとんどが義歯だった。彼は生涯、虫歯と膿漏に悩まされたようだが、1899年12月のクラウズリー・ジョーンズ宛の手紙に現れた「この30日間で歯医者の子約を9回とった」(Letters, p.139)という一文などは彼の歯の状態を端的にあらわしている。

36) JB, p.182.

37) Richard O’Conner, *Jack London A Biography* (Boston: Little, Brown and Company, 1964), p. 317.

38) Stasz, pp. 227-46.

39) Kingman, p. 244.

40) Anon., “Jack London: Health Information,” Jack London Research Center; Andrew Sinclair, *Jack: A Biography of Jack London*

(New York: Harper & Row Publishers, 1977), p. 170. シンクレアはロンドンの肉体的衰えを、サルバルサンなど、主に当時流行った家庭医学の知識に基づく薬物使用に起因するとみている。

41) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920* (1981; Chicago & London: Chicago University Press, 1994), p. xv. またリアーズは「多くの労働運動家、社会主義者、反体制農業家は革新主義の教義を容認していた。彼らは経済的発展によってもたらされる利益そのものを敵視していた訳ではなく、富の不均衡な分配を非難していたのだ。彼らは技術革新と国家の偉大さを結びつける因襲的な考えを受け入れていた」(8)として都市ブルジョワジーと彼らの近似性についても指摘している。ロンドンの社会批判はこうした点からも考察する必要があるだろう。

42) JB, p.149.

43) 1880年の人口調査によると、19世紀を通じてアングロ・サクソンの家庭における出生率はじりじりと低下しており、こうした現象を捕らえて、「民族的自殺」と称した。また、民族的自殺の理論と遺伝学(特に優性学と種の選択交配の理論)が合衆国の活力に対する関心と相まって、健康に対する意識を高めていったという[Harvey Green, *Fit for America: Health, Fitness, Sport and American Society* (1986; Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1988), pp. 224-25]。

44) ゲイル・ベダーマンによれば、1890年代までには「理想の男性的肉体の例として身体的な大きさと輪郭のはっきりした筋肉が求められた。ジェイムズ・ジェフリーズのヘビー級懸賞拳闘士の肉体はその最高の例だった」「ボクシングの〈白人種の希望〉ジム・ジェフリーズのような運動家が、筋骨逞しい男性性を見習うべき新しいモデルを提供していた」という[Gail Bederman, *Manliness and Civilization* (Chicago & London: The Chicago University Press, 1995), p. 15]。

45) だからこそ、世界ヘビー級戦で、バーンズに続きジェフリーズが敗れたことは大問題だった。アメリカの白人種の男たちにとって、ジェフリーズの勝利は「過度に文明化したかも知れないが、白人の男たちは、太古の昔からの白人種の支配を可能にした男らしい力を何も失っていないということの証明になるはずだった」(Bederman, p. 41)のだ。

ロンドンジェフリーズの勝利に一財産(四千ドル)賭けて、その結果オーランドの家を抵当にとられるはめになるが(Letters, p. 904n 参照)、こうした行為が彼の思い入れを如実に物語っている。

- 46) スタッズは「どんなに意識的にフローラ(母)に反抗しても、彼女の世界、そのより洗練された家庭に対する考えは、ジャックの考え方を支配した」(Stasz, p. 44)と指摘する。
- 47) ロンドン作家として成功した後、積極的な消費者となった。「ジャックが社交界からの招きに応じることは稀であった」(Kingman, p. 185)のは確かかも知れないが、それでも毎週水曜日の午後を友人との集いの日とした。また彼はアート・アンド・クラブ運動が実践した家作りにも影響を受けていると思われる(Stasz, pp. 209-10)。
- 48) Jack London, an article in *The Medford Sun*, August 18, 1911, quoted in Kingman, p. 226.
- 49) これは対戦相手ダニーのマネージャーの言葉で、要するにイカサマと同義なのだが、試合はフェリベによって真実のものとなる。
- 50) だからといって、彼らが機械時代からすっぱりと抜け出した存在という訳ではもちろんない。むしろその存在は、アンチモダンな衝動を強調する分、かえって時代にとりこまれていることを証明している。

ロンドンが理想とした拳闘士たちは、前近代的な独立自営の職人、あるいは原始的な力をもった存在として描かれてはいるが、実をいえば、と同時に時代の意識を無意識のうちに表象してしまっているものである。フェア・プレイを持って美德とし、

僕は誰よりも清潔な生活をしている。風呂に入って、身体摩擦をし、運動をこなして、時間を守る。よい食べ物をたべて、過食を避け、酒も飲まず、煙草も吸わない。身体に悪いことはしないんだ(26)

というジョー・フレミングは、すでにして、仲間を助けるためにはイカサマも厭わなかったという過去の拳闘士たちのひとりでは決してない。彼は「薫蒸消毒」されたリングにあがり、クィーンズベリー・ルールという「規則」によって規定された試合を行うボクサーであり、体重別階級制度によって「区分」され「標準化」された運動家のひとりにすぎないのである。

「スロットの南側」[in *The Complete Short Stories of Jack London*, eds. by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard (Stanford, California: Stanford University Press, 1993)] のフレディ・ドラモントは

有名なボクサーだったが、自動人形として知られていた。彼は非人間的な機械の正確さで距離をはかり、パンチを出すタイミングをみ、防御し、パンチをブロックし、相手を眩惑した(1583)

というが、労働者を解放する英雄ビル・トッツとなる彼をして、すでに機械の言葉で語られしまっている、「機械の身体」を持っているとすれば、「背教者」のジョニーとの相違は見いだせなくなる。

彼らの存在はリアーズのいう世紀転換期の「心理療法的エトス」によって必要とされ、産出されたということも出来るだろう。

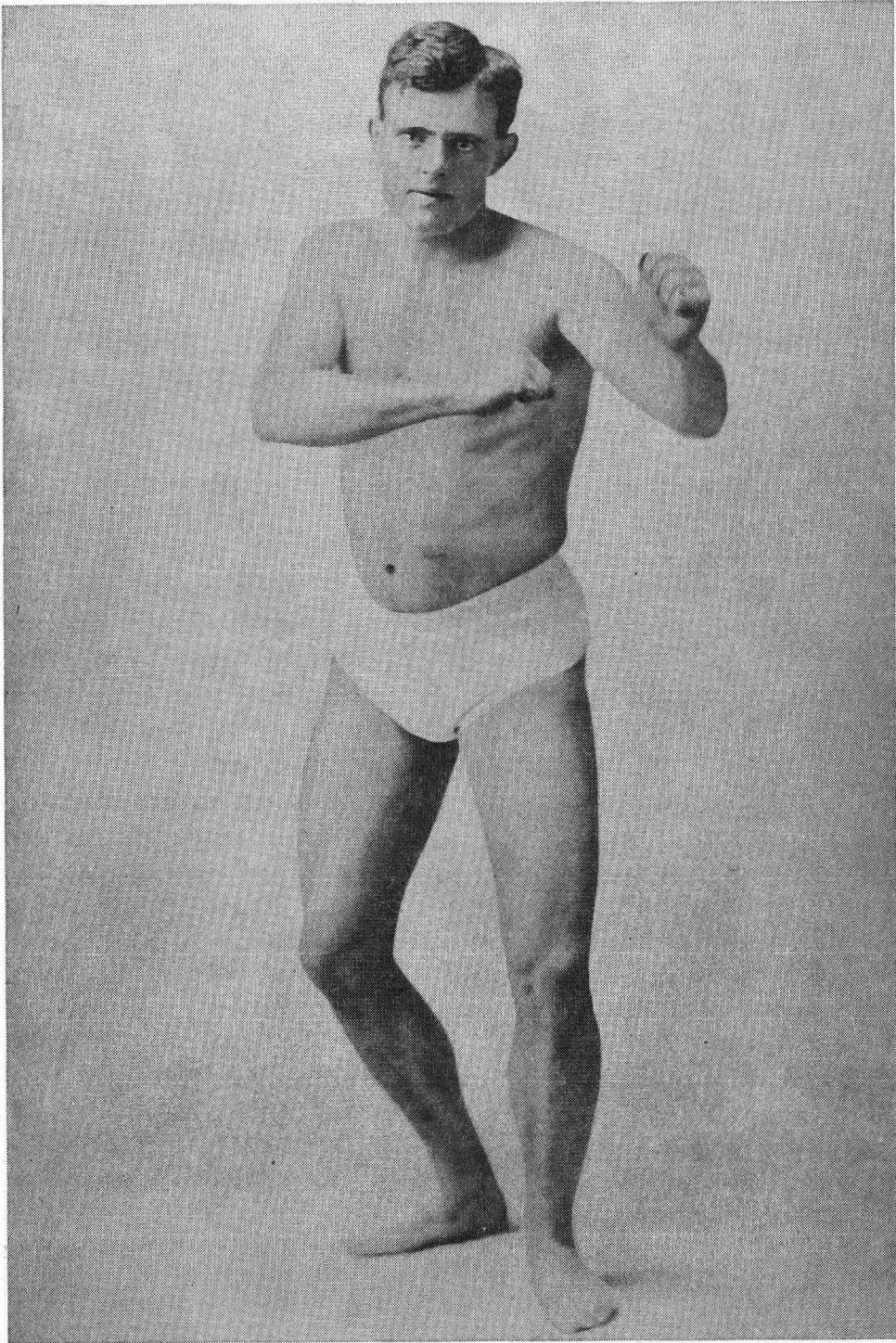
- 51) 1911年10月20日付、シンクレア・ルイス宛の手紙(Letters, p. 1041)、および小林「機械時代の拳闘士(一)——ジャック・ロンドンとボクシング——」、特に「雑誌向けの小説」の項参照。

52)53) Kingman, p. 244.

- 54) ローバート・J・ヒッグスは『奈落の獣』の「神話」の部分に注目し、ディック・シャップやジョン・ロードナーの先行研究を引きながら、「白人種の希望」捜しに火をつけた張本人がロンドンであり、こうした表現とナチズムの結び付きも指摘している[Robert J. Higgs, *Laurel & Thorn: The Athlete in American Literature* (Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1981). 同翻訳書=樋口秀雄訳『月桂樹といばら——アメリカ文学の中のスポーツマン』(松柏社)1996年]。翻訳書、167-68頁。

- 55) 註53)の手紙の続き。また、ある新聞のインタビューに答えて、ロンドンは『奈落の獣』を一番のお気に入りとしてあげている(Kingman, p. 244)。

付記: 本稿は『中央英米文学』27、28号(中央英米文学会、1993、94年)に連載した「機械時代の拳闘士(一)(二)——ジャック・ロンドンとボクシング——」の結論部分にあたる。



ジャック・ロンドン——拳闘士を描いた男

[Charmian London, *The Book of Jack London* (London: Mills & Boon, 1921), vol. 2, p. 31 より転載]